
カスの忠告

瓢六玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カスの忠告

【Nコード】

N2727J

【作者名】

瓢六玉

【あらすじ】

豊和は軟弱なために、誰からも「トヨカス」と蔑まれてきた。しかし、彼の特異な予言は、乙葉の人生を変えることになった……。

(前書き)

これは怪談というよりも奇談の部類かもしれません。

世の中には「縁起かつぎ」があんがい多いものだ。
かつての私もそうだった。

ローカル新聞の「今日の運勢」蘭にかならず目を通してからでない
と出社できなかった。

後年、その習慣が自分でも嫌になって全国紙に換えることにした。

私の同僚・山岸豊和は「縁起かつぎ」を通り越して、ほとんど強
迫神経症の領域といってよかった。

彼はあらゆることを気にし、それゆえの神経衰弱でたえず胃を患
っていた。

彼のクダナイ自慢のひとつに心療内科の待合室で青年コミック
誌と少年コミック誌をタダで三年も読んだというのがある。

こんな人物だから女子社員はモチロンのこと男子社員からも、ほ
んど相手にされなかった。

シャツの下から二番目のボタンのようにあってもなくてもいいよ
うな存在だったのだ。

そんな河童の屁のような何の魅力もない豊和は、どういうわけか、
私とは小中高と同じクラスであった。

さりとて、奴に異性として惹かれたことは一秒たりとてないが、
悪縁というか、ワキガ臭のように嫌でも自分にまとわりつくこの腐
れ縁の男があっけなく事故で逝ってくれた時は

（ありがとう。トヨカス）

と、つい内心よろこんでしまった。

口に出して

「いなくなってくれて、ホッとしたわね…」

と囁いた女子社員だったのだから私なぞまだモラリストの部類だろう。

ちなみに、彼のアダ名は小学校以来「トヨカス」である。

ひどい奴になると略して「カス」と呼んで、みんなでいじめていた。

この何でも気にする男で最高傑作だったのは、『リング』というホラー映画をテレビで見たときだった。

劇中に出てくる「呪いのビデオ」を自分も見ってしまったので（テレビ放映で）ほんとうに一週間後に貞子がテレビから出てくると思つて（笑）、自分の部屋のテレビを捨てに行った、というから見事な馬鹿である。

『名探偵モンク』も似たようなキャラだが彼にはアスペ特有の超人的推理力があるがトヨカスは名前のとおりスカスカの「カス」なのだ。

こんなカスを、蛇蠍だかつのごとく嫌っていたのが親友の祐子だった。その卑屈な態度はもとより猫背でガニ股で奥目で出ツ歯という救いがたいほど醜い容貌を社内一美貌のユッコはまるで人類ではないかのように見下げていた。

ある日。

カスが私の処にやってきて、コソコソと耳打ちをした。

「あのさ。オトちゃん。

ユーコさんの誕生日って知ってるかい？」

「なにッ？ おまえ、ユッコの誕生日知って、どーすんだよ？」

「いや、別に…」

「てめえ、変な色気だすんじゃないぞ。

カスがあ…」

私はつい、クソ男子社員につけられたアダ名どおり「オトコ女」の口調になってしまった。

本名は乙葉なのに…。

カスは醜い顔をすこし赤らめた。

私は、親友の誕生日は口が裂けても言わん！ と、カスに、はっきり言ってやった。

カスはしょぼんとしながらも自己憐憫のようなキシヨイ笑みを浮かべて去っていった。

（馬鹿タレッ！ 分を識れッ！）

と、私は内心で毒突いた。

それから幾日かして給湯室にいた私の背後から、また、カスが声をかけてきた。

「オトちゃん。今いいかい？」

「なーにッ!？」

また、ユーコちゃんのことおーッ!」

私はわざと大声で言ってやった。

カスはシドロモドロになりあたりをキョロキョロ見まわした。

（ふん。この小心者!）

私は背後に立つカスを忌まひましく感じながらもせつせと二つのポットに水を入れていた。

「あのさ…。

ちよっと小耳に挟んだんだけど、ユーコさんのホロスコープを見た康夫君が言ってたんだ…」

「なによ？ そのホロスコープなんて…」

私はお尻で問いつ返した。

「ああ…。それね、パソコンでやる星占いなんだよ」

「それが、どーしたのよ？」

「それはね、生まれた日と時間で占うんだ…」

「あんた、ユッコの誕生日、盗み聞きしたのね。ヤスから…」

「ちがうよッ！聞いたんじゃないよ。聞こえたんだ…」

カスはチビなりに大げさな振舞いで否定した。

「それより、心配になって…」

「えーッ？ いったい、何が心配なのよッ！

カスのあんたが…」

カスはいつもの卑屈な笑いを浮かべると、もやもやと言った。

「ユーコさん、1月9日の夕方の4時59分に生まれたんだって…」

(チッ…)

私は心の中で舌打ちした。

反吐より汚い、と思っている男に自分の誕生日を時間まで知られていることをユッコが知ったら

どーしよう、と思った。

「その誕生日の何が心配なのよッ！」

私の一言ひとことにはすべて怒気を孕んでいた。

カスは私の毒気に気押されたのか恐るおそる自説を開陳しはじめた。

「あのですね…。

1月9日の4時59分はですね、語呂合わせでは『逝く時刻』となるんです。

占い者によつては『生き地獄』という人もいますが…」

「てめエ、いっぺん殺したるかぁーッ！」

私はトヨカスの首を本気で締めにかかった。

「ホゲホゲ…。ぐめんらはい…。ぐめんなはい…」

奴の顔が十分に充血したところで乱暴に解いてやった。

157センチのオンナ男を175センチのオトコ女が締め落とすのはワケなかった。

まして、私は柔道二段である。

「おまえ、腐った頭で、んなことばかり考えてっから、いつまでたってもイジメられんだぞ。」

いっぺん、脳ん中の水とりかえろッ！」

そう言っても、まだ腹のムシが収まらなかった。

両手に持った水入りポットの片っ方でモジャモジャ頭をガキツと思いい切りぶっ飛ばしてやったら

奴がかがみこんだのでようやくスッキリした。

「このタコッ!!」

そう罵声をノータリンに浴びせて私はオフィスにもどった。

2課の窓際席ではユッコが眉間にしわを寄せてカチョカチョ…と、キーを叩いていた。

それから数週間は何事もなかったが、昼休みに、またまた、カスが声をかけてきた。

私が露骨にグイと睨みつけるとカスは女子中高生がやるような複雑に折った手紙のメッセージをだまって私の机におくとぴゅうと飛んで出ていった。

めっちゃ、うっとおしかったがそいつをピラピラと開いてみた。

オトちゃん。

しつこくてゴメン。

これが最後だと思ってどうか捨てないで読んでください。

お願いします。

やっぱり祐子さんのことがどうしても気になって…。

こないだのこと、まだ祐子さんにはお知らせしてないと思います
が…。

こないだ言いたかったことは僕の知っている霊能者の先生が祐子

さんの誕生日と時間をみて

「この人は車を運転しない方がいい。

そうでないと、命にかかわる事故に遭うかもしれない」

と言ったからなんです。

笑わないでくださいね。

この先生は、普段はふつうのサラリーマンなんだけど、透視能力があつて難病の人を何人も霊視で治したり倒産しそうな会社をいくつも立て直したりして今はまだマイナーな人なんだけど「鎌田の生神様」って呼ばれてる人なんです。

その人がたまたま母の知り合いでウチに遊びにきた時に、ちょっとした悪ふざけのつもりで

「この人はどんな人と結婚するんですか？」

つて、祐子さんの誕生日の数字だけ見せたんです。

そしたら、イキナリさっきの答えだったんで驚いたんです。

ほんとにバカみたいな話ですけど、オトちゃんも祐子さんの親友ならどこかに留めておいてもらいたくて手紙を書きました。

ほんとに、気を悪くしたらゴメンね。

なんだか、あまりにクダラナイ内容で私は読んだことを後悔していささか脱力気分になった。

(馬鹿は死ななきゃ治らない、か…)

ホントにそう思った。

その手紙から一週間後、トヨカスは海沿いの国道で酔っぱらい運転のダンブに正面衝突されて、あっけなく車ごとペチャンコになつて死んだ。

トヨカスの訃報を会社で聞くと

(なんでい…。

おっ死んだのは、てめえの方じゃん…。

バツカでい…)

と真っ先に思った。

そして、会社では何事もなく、ふた月が過ぎた一月九日の日曜日だった。

その晩はユッコの誕生パーティーが小さなフレンチ・レストランを借り切ってやることになっていた。

ユッコは夕方近くわざわざ私んちに寄って車で拾ってくれた。

「ねえ、まだ時間があるからちよつと遠回りして海でも見てから行かない？」

とユッコは言って、街外れの国道に向かった。

三十分ほど走ると、ちょうど日没でオレンジ色の硝子の粉を一面に散らしたような眩い海を見ることができた。

「キレイね…。

なんだか、誰かに素敵な誕生日プレゼントをもらったみたい…」

ユッコはウツトリしていた。

「そうね。

二十五年まえの今頃…

あんた、この世に出て来たのね…」

と私が言うと

「ひとをウンコか貞子みたいに言わないでよ！」

と笑った。

車は郊外のレストランに向けて海岸通りを走っていた。

窓を全部あけ放って潮風を全身に浴びながら走るのは爽快感そのものだった。

ふたりの髪が疾駆するプジョーの車内でサワサワとなびいていた。

次の瞬間。

対向車線を走っていた大型トレーラーが中央分離帯からユラリと外れたかと思うとプジョーの鼻先に突っ込んできた。

私があがついた時は、すでにレスキュー隊が到着していてつぶれた車内から二人を引っ張り出そうとバーナーでボディを焼き切る作業をしていた。

トレーラーは運転手側のドア近くに衝突したらしくユツコの体はメチャメチャになっていてほとんど人の形を成してなかった。

私は顔面からおびただしい出血をしており、右手、右足は複雑骨折したようでブラブラ状態だった。それでもまだ、痛みを感じるだけの意識があった。

頭も動かせない状態で目だけが辛うじて動かせた。

私の膝の上にユツコの千切れた左手首がゴロンと落ちていた。

金のブレスレット時計はガラス板が粉々に碎け散って文字板が露出していた。

時間は4時59分で止まったままだった。

1月9日4時59分…。

カスが言っていた「逝く時刻」と「生き地獄」という言葉が脳裏に浮かんだ。

私の動かない右の足元にはスピードメーターが転がっていた。

かすみがちな目にトリップカウンターの数字が飛び込んできた。

422194

それは、

「死に行くよ」

と読めた。

(後書き)

これは4年前に亡くなった怪談好きで親しかったイトコのT君から、子どもの頃に聞いた最後のオチを使って、語呂合わせものに仕立ててみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2727j/>

カスの忠告

2010年10月8日15時56分発行